

源流人会だより

# ぽたたい!

源流のひとしづく

第4号

2004 秋号

## 森と水の源流館

住所 ● 奈良県吉野郡川上村宮の平  
財団法人吉野川紀の川源流物語  
TEL ● 07465・2・0888  
FAX ● 07465・2・0388  
URL ● <http://www.genryuu.or.jp>  
E-mail ● [genryuu@joy.ocn.ne.jp](mailto:genryuu@joy.ocn.ne.jp)

### CONTENTS

- ・コラム～秋の山と川～
- ・源流学講座①
- ・調査報告～巨樹～
- ・源流人会活動報告
- ・川上村見聞録①
- ・新コーナー ～交流のページ～  
～源流のよりみち～

## 新コーナー スタート

『交流のページ』 『源流のよりみち』



## 水源地の森の主 アマゴ

アマゴ (天魚)  
サケ目サケ科  
水源地の森にて

人の気配を感じると岩の下に隠れてしまうアマゴ。木漏れ日がまぶしい雨上がりのこの日は数匹のアマゴが人を気にせずゆうゆうと泳いでいました。この淵でこんな光景に出会えたのは一度きり。

# ぽたたい

源流のひとしづく

秋  
第4号

発行所 ■ 財団法人吉野川紀の川源流物語 財団法人吉野川紀の川源流物語 TEL 07465・2・0888

## “森と水の源流館”

## ミュージアムショップ



「健康な体ときれいな水を守る」がテーマのシャボン玉石けん。材料は良質の天然油脂（牛脂、ヤシ油、米ぬか脂肪酸などの動植物油脂）を原料にした、純石けん分99%の無添加石けんです。この石けんは動植物性油脂に水酸化ナトリウム（液体の場合は水酸化カリウム）を反応させてつく昔ながらのシンプルな製造方法。家庭排水として流された石けん水は、1日で水と二酸化炭素に分解され、石けんカスは微生物の栄養源になります。

台所、洗髪、洗顔、歯磨き、洗濯用など、いろいろそろえています。石けんを使わなくてもたいの食器は洗えますし、歯磨きも基本的にはブラッシングで十分。でも、'何も使わない'に抵抗のある方は、洗剤生活のどれか1つから石けんに変えてみてはいかがでしょうか？

\*合成洗剤は、タンパク質吸着性や浸透性がすぐれているという特徴から、皮膚を通して直接血管に浸透してしまいます（口から入るよりも残留時間が長い）。異物、毒物を分解する肝臓でも分解できないため体内を循環し、一部は脂肪の多いところなどに滞留することになります。とりわけ肝臓・腎臓に問題を生じさせることが動物実験で分かっています。

(株)シャボン玉本舗

<http://www.shabon.com/> Tel 0120-480095



(右下の石けん 136円～)

## 水源地の森守募金

報告 9月12日 「第3回 水源地の森守募金キャンペーン」  
総額 379,793円



▲ 葉っぱのタバストリーづくり



▼ シャベリBAR

「水源地の森守募金キャンペーン」では会員のみなさん方にお手伝いいただきありがとうございました。

今年のキャンペーンは募金のPRだけでなく、水環境を守る取り組みや、吉野川・紀の川にかかわる活動をしている人たちの交流を深める場・情報発信の場にしようと呼びかけました。

その結果、11の個人・団体の方から、間伐材の楽器演奏や苗木配布、エコ商品や伝統食・野菜のチャリティ販売、活動報告での参加があり、午後の「シャベリBAR」では、水環境保全への取り組みや意見などが交わされました。

お寄せいただいた募金は、森と水の大切さを知ってもらう副読本の制作に充てられていますが、今後は「源流学の森づくり」事業や「水源地の森」の保全を呼びかける看板の設置にも充てる予定です。

毎年9月第2日曜日に開催されるキャンペーンに今後ともご協力をお願いいたします。



▲和歌山・大阪・京都の方もおいしかったです

編集後記  
今号は新たに交流のページができました。なかなかお会いできない源流人さんともほほほほと通じて交流してゆけたらいいな、と思っていました。編集作業にご協力いただきました金子裕志・智美さん、ありがとうございました。度々の台風で川の姿が変わった水源地の森。尾根を越えたり川村でもたくさんの命や物が奪われようです。それは悲しき辛い出来事です。宮川村の会員の形ではなくなりましたが、得られたと話してあげたい。地域・人もライフレイン。大切な人が、あたたかさ、大切にしたいです。

### 編集後記



年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,000円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

源流人とはかけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育ててゆこうとする会です。  
源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です。  
ともにも源流学を深め、仲間を紹介ください

## 源流人募集!

このページは源流人会会員さんや、源流・川上村とつながる個人・団体のみなさんの活動紹介や情報交換の場です。

## ■本の紹介

森の「聞き書き甲子園」は、まちに生まれ育った高校生と、森に生きてきた人たちの対話・交歓。「森の名手・名人」を訪ね、知恵や技術、ものの考え方や生きざまを「聞き書き」し、その成果を世の中に伝えていく活動です。2003年秋、第1回に参加した高校生のうち7人が、森の名手・名人の暮らす森を訪れ、再会した「ふたたびの旅」、「参加高校生座談会」など、4章からなります。この本には、川上村出身の杉本充（源流人会会員）さんが「森の名手・名人」として登場します。当館2階のライブラリーでもご覧いただけます。



『森の人、人の森』  
森の聞き書き甲子園が高校生にもたらしたものと森プロジェクト編著  
・人と森プロジェクト編著  
・発行ウェッジ 213ページ

## ■孟子（もうこ）不動谷へぜひ！！

源流の森に源を発する紀ノ川の支流・貴志川左岸に位置する和歌山県海南市孟子（もうこ）不動谷で、1998年より里山自然の保全活動を行っているNPO法人です。孟子不動谷は、最深部に弘法大師空海が滝の岩に刻んだとされる不動明王を御本尊とする孟子不動院那賀寺が祀られた面積6ha強の小さな谷間です。現在までの生態調査の結果60種を超えるトンボを初めとする700種の昆虫類、サンコウチョウ等100種を超える鳥類が確認されています。そんな豊かな孟子不動谷にぜひ遊びにおいで下さい。そしてわれわれの仲間に入りませんか？自然大好き！人間大好きのみなさまのご来場を心よりお待ちしております！！



野鳥観察会でのコマ

＜問合せ先＞  
特定非営利活動法人 自然回復を試みる会・ピオトープ孟子 理事：有本 智  
メール：maiko-symp@rio.odn.ne.jp

## ■森の中のおはなし会

吉野に嫁いで18年。素敵な仲間と出会い、幼稚園や小学校等にお話の出前に行っている。その名も「おはなしらんどカンブリア」。森や空や風を感じながら、子ども達にお話をするのが夢だった。おとし、三之公の森で人形劇をする機会を頂いた。私の大好きな「梨とり兄弟」という日本の昔話を大きな岩を舞台にして演じた。この日は小雨が落ちる寒い秋の日で、子ども達は震えながらお話をきいてくれた。昔話は遠い祖先からのメッセージであり、そこには自然とともに生きていく知恵が伝えられている。もともと語りは夜行われるもので昼の語りはタブーとされていた。一日の営みが終わり、火を囲み、神話が語り継がれ、昔話が生まれた。いつか火を囲み、山の精気を感じながら、子ども達とお話を楽しむ時間が持てたらいいな。（松谷圭子）



## ■「カンリンバ作り」 綾香ちゃんからのお便り

このまえカンリンバ作りをしにいきました。しん友のりなちゃんで行きました。わくわくしながら川上村に行くとリンダがまって、森と水の源流館までつれてくれました。わたしは、川上村が大好きです。いつみても自然にかこまれ、そんな所が大好きです。カンリンバ作りは2度目でカンリンバはたからものとして大じにおいてあります。あのときたべたアマゴのあじは今でもわすれられません。またたべたいな。また行きたいな……。

山田綾香（五條市 小学5年生）

綾香ちゃん、ありがとう。またりなちゃんと来てね！りんだより



去年は水源の森でカンリンバづくり



# 秋の川と山

9月になると、落ちアユのシーズンです。徐々にアユが下り始めます。本流のあちこちで、流れの中にロープが張られました。川を下るときにアユが抵抗になってその上流にアユがたまるのです。大滝地区には、関西電力の堰堤があつてその上流は毎年アユがたまる場所になっていま

した。下流に下れないときには、そこが産卵場所になったようです。夜の闇の中でケツバリ（オモリの下に引つ掛け針をつけたもの）を転がして、アユがかたまつて群れているところに針が入るとアユが掛かります。毎晩のようにそこには誰かが釣りに入っていました。最盛期には、

10月にかけては、アケビ採りでした。家の周りでは柿、栗、桑の実も食べたのを覚えています。十分に熟すまで待てずに、渋い段階から熟すまでの、いろんな味を思い出します。もう少し経つと、冬のイチゴがすすばくて、一番印象に残っている味です。今でも時折採りに行きます。

5月末から9月下旬まで吉野川はアユを追いかけたの様々な漁法で賑わいを見せていましたし、人々の心も落ち着かない日が続きました。アユが去った後、子どもたちの目は山に向かいます。9月の下旬から10月にかけては、アケビ採りでした。家の周りでは柿、栗、桑の実も食べたのを覚えています。十分に熟すまで待てずに、渋い段階から熟すまでの、いろんな味を思い出します。もう少し経つと、冬のイチゴがすすばくて、一番印象に残っている味です。今でも時折採りに行きます。

落ちアユは婚姻色になっています。圧倒的にオスが多くてメスが少ないのですが、メスのお腹には卵が大きな塊になっていて、大変おいしかったのを覚えています。我が家の料理方法は、煮つけ（味噌味・醤油味）、塩焼き、フライ、味噌とニラのホイール焼きなど……。卵をもったメスは醤油で煮つけます。

夜が明けるまで掛かり続けたと聞きしました。台風が来て増水すると、その水にのって一気に下つてしまします。台風シーズンのため、増水するかしないかが、大変気になったものです。落ちアユは婚姻色になっています。圧倒的にオスが多くてメスが少ないのですが、メスのお腹には卵が大きな塊になっていて、大変おいしかったのを覚えています。我が家の料理方法は、煮つけ（味噌味・醤油味）、塩焼き、フライ、味噌とニラのホイール焼きなど……。卵をもったメスは醤油で煮つけます。

# 川上村見聞録 ①

\*このコーナーでは、民俗担当の黄瀬が村で見たこと聞いたことを「川上村見聞録」として紹介していきます。

## 「瀬戸の地藏まつり」

瀬戸集落のお地藏さんの由来は、後醍醐天皇の皇子、護良親王にかかわりがある。護良親王は足利尊氏と対立して、鎌倉に幽閉された後、殺されたというのが定説だが、いやいや実は奥吉野に逃げた、という話が地元で伝承されている。そして、その時に親王のお守りとして持ってきたのが、このお地藏さんだといふ。

8月24日「地藏まつり」があるというので、お邪魔した。



▲行事がある浄土宗 安養寺

7〜8年前まで、コウリトリといって、夜明け前のまだ暗いころ、早い人だと提灯をもって家を出て、サカキの葉を33枚とって、一枚づつお地藏さんにお供えしてから「大谷の滝」の上流に流し、家内安全を祈ったという。

なぜ提灯をかざしてまで、夜暗いうちにするのだろうか。物知りのおばあさんに聞くと「そりゃ、護良親王をかくまっていたわけやから、人目をばばかる、ゆうことやるな」と返ってきた。ここ川上村で最期を迎えた、他の後南朝の皇子らの哀史もそうだが、今も村の人たちには数百年の歴史をゆくに飛び越える心の風景が広がる。

さて、コウリトリが済んだら「ジユズクリ」だ。14時頃から聞いていたので、ちよつと早めに13時に行ったら・・・なんと任職以外ほぼ全員がスタンバイしていた！は、早い！早すぎる・・・

大きなジユズを老若男女が輪になつて練る。ひととき大きな玉がまわつて来たら、頭にいただかす。小さな子どもも一生懸命。神妙な面持ちの大人に混じって、こうして子ども達は伝統行事を通して、自分達の集落の「風土」を学んでいくのだろうか。なんて幸福な学習なのだろう。



▲ジユズクリの様子

住職のお説教をいただいたら、なにやら皆そわそわ。お供え物がたくさん載った棚を解体し、おもむろに掛け軸まで片付ける念のいれよう。「ん？」と思つていたら、突然も突然！なんの前触れもなく突然ゴクマキが始まった！大人も子どもも、すさまじく動く！音もすごい！あまりのパワーに一瞬、見ているこちらが我を忘れる。

何百年も練り広げられてきた、瀬戸の集落の歴史と底力を、その瞬間、垣間見た。

▼餅や菓子が舞うゴクマキ



▼「ぼく、いい場所にいたから、こんなに拾えてん！」



## 源流学講座

### 第1回

### 山に入るときの心がまえ

源流学講座初回ということ、まず山・森に入るとき心がまえや、最低限これだけはやらなければならぬ、達っちゃんからの一言です。

- 一つ、自分の安全は自分でまもる
- 一つ、危険を感じたときは決して無理をしない
- 一つ、軽快に作業ができる服装
- 一つ、危険なことへの対処
- 一つ、作業に適した道具を選ぶ
- 一つ、仕事の段取り
- 一つ、山の神をお祀りする
- 一つ、弁当は最後のひと口は残す

山では特に自分の身は自分で守る「自己責任」で行動することが大切。危険を感じたとき、不安に感じたとき、自信のないときは引き返したり、止める勇気が必要です。服装でも危険を回避することができません。長袖、長ズボン、手袋を着用していれば、ヤマビルやマムシ、ハチなどの毒をもった動物や、ウルシなどのかぶれる植物や毒草から身を守ることが出来ます。手袋はすべり

川上生まれ川上育ち、山仕事50年以上の達っちゃん（辻谷達雄館長）より、その長い人生の経験の中から生きる力や知恵となるいろいろな話を聞きまとめたものです。

止めつき、靴は館長おすすめスパイク地下足袋が滑らず作業がしやすいです。ただ、木の根をできるだけ踏まないように。根が傷むと木が弱ります。

秋はハチやクマによる被害を多く耳にします。ハチは黒色をねらいますので、黒の服は避け、帽子をかぶりましょう。もし近づいてきたら、けつして追い払ったりせず、姿勢を低くして逃げましょう。ハチに対して左右の動きは厳禁です。もし刺されたら、口で吸ったりせず、専用の吸引器で毒を吸い出します。そしてすぐに病院へ。クマにであつてしまつたときもあわてず騒がないこと。背中を見せず、静かに、目をそらすように近づかないのが一番です。

源流学の森づくりでは、ノコギリやナタを持つて作業します。作業に適切な道具を選ぶこと、道具の手入れも大切です（カマ研ぎ、鋸の目立）。よく切れる刃物は仕事が安全に出来ます。作業の時以外も、山では必需品。刃物があれば木から食料や道具を得ることが出来ます。館長のスタイルはいつも腰にノコギリとナタ。箸も橋もあつという間につくれます。そして作業に入る前には、参加者全員でミーティングを行い、安全に作業できるように話し合います。仕事全体の70%は段取りにあると言われています。



水源地の森の山の神

古来より山は聖なるところ、神が宿るところとされている。その山を荒らしに入るのだから、山の神の怒りを鎮め安全に作業ができるようにお祈りする。作業する山の入口に洗米、塩、魚、酒をお供えし、お祈りをする。山の神は女の神とされているので、祀りごとは一切男だけで行ふ。祀りごとは女がかかわると山の神はヤキモチをやかれ、お怒りになるとの言い伝えがあるので、川上村では今も山の神の祀りごとは女の人は一切かわらない。

また、昔から山にはヒゲル神がおり、ヒゲル神にとりつかれると、体全体の力が抜けて歩けなくなる。その時、弁当の残したひと口を食べると体が回復するので、弁当はひと口残せとの言い伝えがある。川上村のあちこちに昔から「難地（なんじ）」と呼ばれる場所がある。道路でも自動車事故が多発するところがある。今でも夜中を通るときは気持が悪い。こんな話も聞いています。自動車走ってるとき急に車が1回転した。自動車で川まで落ちた人の話では、居眠りもしていません。

山とともに生きてきた川上村には、ここでは紹介できなかった、いろいろな言い伝えや約束があります。それは家や集落によつても異なるかも知れません。詳しくは、館長や川上村のお年寄をつかまえて尋ねてみてください。また、言い伝えもよく調べてみたら科学的な根拠があるのかもしれない。



左) 辻谷館長

7月13日、山梨県多摩川源流研究所長、東京農工大学の菅原先生、そして村の職員といっしょに、三重県との県境、標高1,050m付近の尾根まで登りました。山の神から高低差約600mです。水源地の森は崖と溪谷ばかり。山道をよく知る地元猟師さん(今冬の源流塾の講師)の案内で、谷と尾根の険しい道は時には這うように、手をとりながらブナの林をめざしました。途中、何度も休憩しましたが、険しい山を歩く緊張感と吹き抜ける風の心地よさは格別です。ようやくたどりついたブナの林は、道中の景色もそうであったように、予想通り見通しがよく、茶色い落ち葉のじゅうたんは季節が夏なのか、秋なのか、といった感じです。各地の森もみられる菅原先生に感想をいただきました。

菅原 泉 (東京農工大学地域環境科学部 森林総合科学科 助教授)

川上村の三之公原原始林には、天然記念物のトガサワラを始めとした貴重な植物が多数存在していることが確認されている。今回は、三重県との県境に成林しているブナを見てきた。三之公川から明神の滝を通り急峻な尾根を登り、目的地に到達した。急峻な尾根には、林床の表土が剥き出しになり根返りになったツガやトガサワラの大木が多くあり、その谷筋には表土が厚く堆積しつつあった。さて、ブナ林に入って見ると林床にはバイケイソウの草本類があるだけで低木層は無いに等しく、公園のように見通しが広がった。ブナの大木も多数みられたが、胸高直径の大きいものほど衰弱しているようであった。ブナの寿命は、250年前後と云われているが、この衰弱が寿命と関連しているかは、詳細な調査が必要である。ブナの天然更新は、大木が倒れた後のギャップ(\*)に稚樹が更新していくのであるが、当地には、いくつかの疑問点がある。①現在の照度なら、ササ類が密生しているはずだ。②ササ類が皆無な割に、低木類や上層木を占めるブナやヒメシャラなどの稚樹が無い。このことから、動物による食圧や土壌環境の変化があるものと考えられる。その変化の要因として、樹木の根系に共生する菌根があげられる。つまり、共生のバランスが崩れたことによる樹体の衰弱が疑われるのである。



(\*) 大木が倒れたりして、木々で覆われた空間にぽっかり穴のあいた状態。そこには太陽の光がよく届くので、明るいところを好んで生える陽樹が育ちはじめます。

この調査は水源地の森の一部でしか行っていませんので、まだまだ巨木は存在すると思います。私たちよりはるか以前から水源地の森の移り変わりを知っている森の長老。共生のバランスが崩れたとしたら、それはどうして? どうすればいいのでしょうか? みなさんといっしょに考えてゆければ、と思います。



川上村の主役たち

きのこ

傘と柄のある菌類のことを私たちは俗称して「きのこ」と呼んでいます。きのこは大きな2つのグループに分けられます。植物遺体(枯木や落ち葉)や動物遺体を分解し栄養を取り入れて生長する腐生グループと、菌と植物が植物の根の部分で合体し、互いに細胞の膜を接触させ栄養のやりとりを行い、助け合いながら生活をする菌根グループです。

きのこは分解者(還元者)として、植物や動物の遺体などの有機物を分解して無機物へ還元し、最終的に土へ戻す働きをしています。1億年ほど前の地球には、きのこがまだ存在せず、植物や動物の遺体があるまま化石として残り、それが何らかの化学変化によって「石油」という化石エネルギーの形で残るようになったと言われていました。きのこが出現するようになると、化石エネルギーが地球上から消滅してしまっただけでなく、同時にきのこが存在していたら、現在のそのような文明は成立しなかった可能性も・・・?

源流のギョウギ

吉野町から川上村にぬける五社トンネルが開通したのは昭和48年。この年は大迫ダムが完工しました。当館2階の、天明の家は、約220年前からダムができるまで建てていた家です。ダムができることで100件以上あった家は現在では10件あまり。この入之波という集落で生まれ育った片石金吾さん(区長)と中西きよみさんから伺った河童の話を紹介いたします。中西さんは民宿「かわかみ」の方で、今夏に開催した森と水のワークショップでも、2日目の夜、子どもたちと生話をきかせてくださいました。「ここで生まれ育つて昔の話でできるのはもう3人しかおらず。もうみんなおらへんやつて・・・」



最近では、木材の分解のみならず、ダイオキシン類や内分泌攪乱化学物質(環境ホルモン)などの難分解性物質をも分解する能力を持っていることが判明して来ているようです。きのこのはたらき、ちょっと見なおした?

おばちゃんにちょっと聞いてみました。ダムができるたびに、どんな気持ちだった? 「そんなもん、とても言葉では言いあらわせないわ」と首をふっておられました。「ダムが完成するとき、毎日のようにどこそこが完成すると、毎日このようにどここの区長さんもおばちゃんも、今でも夢に出てくるんは昔の集落のことやなあ。こっち来てからのことは夢に出へんわ」と口をそろえておっしゃってました。

入之波

入之波の辻本家の先祖で半一郎といえらる力持ちがおり、悪さする河童のガタロを陸へ引きずりあげたら、ガタロが「こらえてくれ(堪忍してくれ)」という、「助けてくれたら、門口に何人前と書いてビク(魚を入れておく)をつっておけば逃がしてやったんやわ。それから度々魚を入れてくれたらいいけどなあ、ある日ヤカケ(軒下)に立てかけておいたビクをかけるクイが腐って折れたから、かわりに鹿の角にビクをつるしておいたんやわ、そしたらそれっきり魚をもってこんようになって。ガタロは鹿の角が一番きれいで、「鹿の角だけビクを掛けてくれるな」って言うたのに、代がかわっていつの間にか忘れてしまったんや。せやけど、ガタロがつかまえられるとき、マイモ(里芋)を流しの土間でござしすって、出来物のできかけなんかに貼つたらきつと効くと教えてもらったんや。本家の秘伝になって、おばちゃんが小学生のとき、おばちゃんの手をくじいてん。そしたらお母さんが「辻本さんとこ行って来い」言うて、おばちゃん、妹つれて辻本さんとこ行って、マイモすつたん貼ってもらってん。ほんで風呂入らんと、おばちゃんとおばちゃん。せやからおばちゃんら子どものときははめたに医者が行ってん。ほんで、これは辻本さんが流しですつたマイモしか効かへんかったん。ほんまに不思議やわ。おばちゃん、おばちゃん。せやけど、入之波の林治つもん、辻本さん引越してしまつた。半一郎さんのお墓もダムで沈ん

## シリーズ vol.4

# 「吉野川源流－水源地の森」 生態調査報告

## 巨樹

この調査は、吉野川・紀の川の源流部に位置し、川上村が購入し、保全している原生林「水源地の森」の保全を進めるための基礎調査として、この森と水の源流館に生育・生息する動植物の現状を把握するための基礎データを得るものです。

期間：2003.11～2004.3  
調査地域：水源地の森  
(全740haのうち382ha)  
調査項目：植物・巨樹・哺乳類  
鳥類・両生類  
は虫類・魚類  
底生生物・陸上昆虫類

調査期間：冬季（越冬期）：2002.12.11～13  
初夏（繁殖期）：2003.5.26～28

### 水源地の森の植生の概要

水源地の森は、平均気温および暖かさの指数、寒さの指数から暖温帯から冷温帯地域に属し、植生タイプは暖温帯常緑広葉樹林の上部から冷温帯落葉広葉樹林の下部に属し、両帯が重複して出現、ツガ、モミ、トガサワラなどの針葉樹が主体となって混生する推移帯が成立していると思われまます。これは、本州の太平洋斜面で黒潮の直接影響を受ける山地林の特徴といわれています。

巨樹は、幹周が300cm以上の樹木について、樹種、高さ、胸高直径（地上1.3mの高さの直径）を測定しました。

今回の調査で、巨樹に該当する樹木は66本。最も多かったのは、トガサワラで11本。次いでシオジ7本、トチノキ・モミが6本と、針葉樹および沢筋に生育する樹種が多いです（針葉樹の巨木は多く、測定できなかった個体の方が多かった）。最大はカツラで、萌芽枝をいれた幹周740mの木が確認されました。樹高でみれば、山の神尾根平地のトガサワラが、土壌が深いのか約45mで、最大でした。ここにはブナ帯と亜高山帯との移行帯に出現するウラジロモミが、台風後に倒伏したおかげで樹種が確認できたものもあります。海岸部の標高の低いところにみられるカクレミノが標高750m地点にみられたのも、また興味深いといえます。本来攪乱が多く、不安定な立地に成立する溪谷林構成種であるトチノキ、シオジ、サワグルミに巨樹が多く、原生林の様相を呈していました。

また、幹周1mは越えないけれども、樹種として大きいと思われる樹木（テツカエデ、ハリギリ、カクレミノ、オニイタヤ、ヒメシャラ、ヤマグルマ等）も確認されました。

今回の調査で注目すべきは、このトガサワラの出現で、下流の三之公川流域にも国天然記念物のトガサワラ原生林がありますが、本地域にもかなりの個体数が認められ、それもまとまった巨木林をなしていた地域（山ノ神尾根）も確認されました。



▲トガサワラの葉

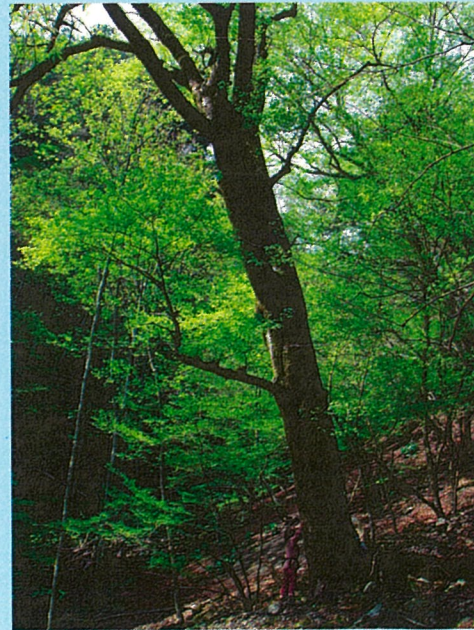
▼カツラ



▼トガサワラ



▼オニイタヤ



# 源流人会活動報告

## 7/3・9/19 源流学の森づくり

7/3(土)曇りのち晴れ  
「水源地の森の調査」下層植生を調べます」

水源を守る豊かな森がずっと続いてくれたら…。でも気付いている人がいるかも知れません。この森の次世代を担う若い木々たちにお目にかかる機会が少なくなっていることを。尾根や谷など5力所に柵を設置し、大型動物の影響を排除してみたら何が起るのかを調査しています。今回は、このような若い木々たちの状況を知るための調査です。柵の内側に1m<sup>2</sup>の方形区を設け、この中に生えている木々の子供たちを調べます。

標高約950m付近のモミ・ツガ・トガサワラの大木の森まで、高低差450mをサカキの花を観察し、ほんのり甘いタムシバの葉を味わいながら、2時間強かけて登ります。

昼食後、柵内から作業開始。2人1組になって、1m<sup>2</sup>の方形区内に生えている植物の名前、特徴、本数を記録し、写真を撮ります。柵内の方形区には今年芽生えた実生(種子から発芽したもの)が顔をのぞかせています。名前の分からないものは「ブナモドキ」とか勝手に名付けてスケッチし、あとで調べます。

あつという間に1時間近く経過。時間的に柵外の調査も終わるかと思いましたが、柵外は実生の数が



少なく、調査慣れした私たちには物足りないくらいでした。

種類数は柵内の20種に対し、柵外は7種。柵設置から1年。その効果が少しずつ出ている事を確認しました。柵の効果は今後どうなっていくのか、今回見た実生がきちんと育っていくのか、今後も見守っていきたいと思います。(会員 No.3 横田)

### 9/19(日)源流学の森づくり (水温 18.5℃)

奈良・三重・大阪・滋賀・和歌山市から10名が集まりました。午前中はおおむね除伐された和歌山市民の森から、まだ猫のひたいほどの手の加わった源流学の森へと尾根筋に歩きました。昼食には参加者からのさしいれ、天然舞茸をいただき、秋

●「源流学の森」って？  
吉野川・紀の川源流部の原生林、「水源地の森」の川向に20年ほど前に伐採された天然林があります。その一角をお借りして源流学の森と名づけました。伐採後、自然に再生しつつある若い天然林は今ほうっそうとしたやぶです。源流学の森づくりは、再び原生林のような森にもどすことが目的ではありません。「学」の森なのです。源流の森や風に耳をかたむけ、実体験とおして、生きる力や様々なことをともに楽しみながら学び考え実行してゆく、そんな場なのです。

の恵みに感謝。午後は斜面に道をつくる班と、前回に続き木のネームプレートをかける班にわかれて作業しました。新たに11種類の木に名前がつけられ、またこの木に会える日が楽しみになってきました。

今回は、足場の悪いところでアクシデントもあり、安全管理が課題となりました。自然に危険はつきものですが、物的な備えと山の知識や心構えが大切です。今後も森づくりをおして様々なことを学んでゆきたいです。

### 参加者の声

源流学の森づくりに何度か参加していますが、林業とはこんなにも大変なものかとつくづく思います。

初めて参加した時の作業は、除草と除伐。ほんの2時間程度の作業でしたが、急な斜面で足場も悪く、除伐するのも本当に大変でした。カマ、ノコギリも思うように使えず作業はかたがた。何時になったら予定している箇所の間伐が終わるのやらと思いました。

今回の森づくりは、林道を作る作業。林道づくりも初めての体験。戸惑いながらの作業でした。最初はどの様に作るのかまったく分からず、ただ見ているだけ。教えてもらい、やっと、鋸で山側を削り谷側に土を出す。そして、谷側の方が高くなるようにする。そう

することに少しづつ道の形になって行く。1日かかっても何メートル進んだらうか。除伐も大変だったけれど、林道づくりも大変。山仕事は本当にきつい仕事だつくづく感じた1日でした。けれどもまた、皆さんと共に心地よい汗をかき喜びを十分感じられる1日でもありました。

今作業をしている所が立派な水源の森になるかどうか、100年後、200年後にならぬと結果は分かりませんが、蘇った森は自分の孫、曾孫、まだ先の者しか見ることはできません。原生の森は、水を蓄え、多くの生き物がすみ、我々に多くの恩恵を与えてくれます。

今私たちがやっていることは、微々たることでしょうか。自己満足の世界であると思います。一度壊された自然を元に戻すには長い時間が掛かります。森から受けている恩恵をもっと多くの人たちが感じ、気付いてもらいたいと思います。(会員 No.31 辻井)

源流学の森ではいつもいい汗をかいて、四季の移り変わりを感じ、自然を再認識するきっかけとなっています。

9月19日の道づくりでは、秋の気配が感じられましたし、またお昼にいただいた舞茸の味噌汁もとてもおいしくいただきました。次に森に入るのを楽しみにしています。(会員 No.52 堀)